第二巻

現代の批評理論

岡本靖正・川口喬一・外山滋比古 編

批評とイデオロギー

研究社出版

第三巻

現代の批評理論

批評とイデオロギー

岡本靖正・川口喬一・外山滋比古 編

研究社出版

KENKYUSHA

〈検印省略〉

「現代の批評理論」第三巻
批評とイデオロギー

定　価　二二〇〇円
一九八八年九月二〇日　印刷
一九八八年九月二五日　発行

編　者　岡本靖正・川口喬一・外山滋比古
発行者　石川雅信
発行所　研究社出版株式会社
〒一〇一
東京都千代田区神田駿河台二―九
電話（編集）〇三―二九一―一四一六
（販売）〇三―二九一―二三〇一
振替　東京七―八三七六一

印刷所　研究社印刷株式会社
装　幀　井村治樹

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します。

© Kenkyusha / Printed in Japan
ISBN 4-327-15203-X C0398 ¥2200E

第三巻執筆者一覧（執筆順）

唐澤　恪（名古屋大学教授）
目羅公和（日本大学助教授）
利沢行夫（筑波大学教授）
時実早苗（東京農工大学助教授）
酒井正志（中京大学助教授）
佐久間良子（東京学芸大学助教授）
赤祖父哲二（筑波大学教授）
斎藤　衞（大阪大学教授）

「現代の批評理論」第三巻

批評とイデオロギー＝目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一　精神分析学

相互交渉批評……唐澤　恪
ノーマン・ホランド　4

主観批評——異端のパラダイム……目羅公和
デイヴィッド・ブライヒ　29

二　マルキシズム

二〇世紀思想のモデルを超えて……利沢行夫
フレドリック・ジェイムソン　54

始まりと終わりの眺望……時実早苗
エドワード・W・サイード　77

科学的認識からの革命批評……酒井正志
テリー・イーグルトン　100

三　フェミニズム
解放への解釈……佐久間良子　130
ショーウォーター、ギルバート、グーバー
四　現代批評の伝統
隠れ神学……赤祖父哲二　154
ポスト構造主義の背景
英国伝統派の立場……斎藤衛　175
ルイス、ガードナー、ベイリー、ロブソン
参考文献　202
用語解説　215
索引　242
第一巻　物語と受容の理論
第二巻　構造主義とポスト構造主義

「現代の批評理論」第三巻

批評とイデオロギー

一　精神分析学

相互交渉批評

ノーマン・N・ホランド

唐澤　恪

1　新批評家ホランド

ノーマン・N・ホランド(一九二七―　)の文学理論の展開は、一口で言えば、テクストから読者側への焦点の移動、とみなすことができよう。この点にくわしく立ち入る前に、ホランドと新批評の関係を少々考えてみたい。新批評は、彼にまさに一つの刻印を押しているように思えるのだ。

『文学への反応のダイナミックス』(一九六八。以下『ダイナミックス』と略記)の序文で、ホランドは「同世代のほとんどの批評家同様、私もいわゆる『新批評』に非常に影響されたし、それに満足も感じていた」と述べている。一九五〇年代の批評風土を反映した最初の二著書、『初期近代喜劇』(一九五九)と『シェイクスピアの想像力』(一九六四)の特徴は、のちの『私』(一九八五)によれば、表層分析、精密な読みである。『シェイクスピアの想像力』では精神分析的な解読がすでに試みられており、次の著書、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『精神分析とシェイクスピア』（一九六六）を経て、『ダイナミックス』にいたると、精神分析、とくに自我心理学が基礎理論として用いられている。しかし、これらの著作においても「精密な言語分析」（『ダイナミックス』序文）の方法はすてられていない。テクストはあくまで自律性をもつものとして、そのような分析の対象とされている。

ホランドの文学理論はやがて「相互交渉批評」(transactive criticism) の理論へと展開していく。『五人の読者の読み』（一九七五。以下『五人の読者』と略記）によれば、この批評は「読者とテクストの間の相互交渉」(transaction) を扱う批評であり、一九七五年以後、ホランドは新しい批評として繰り返しこれを宣伝することになるが、彼自身の作品解読はといえば、新批評的傾向を脱するものではなかったようである。例えば、『五人の読者』において、ホランドは「六人目の読者」としてフォークナーの「エミリーへのばら」を「いささか古くさいものになった新批評にいまなおひどく忠実な態度で」解読してみせている。

ホランドが「新批評」というとき、この語はおおむね、テクストの表層テクスチャーの精密な分析、というほどの意味で使われている。が、たぶんホランドと新批評の関係を考えるうえでとりわけ重要なのは、彼が『五人の読者』以後つねに言及する「全体論的方法」(holistic method) の概念であろう。ホランドはこの方法を、ポール・ディージングの『社会科学における発見のパターン』（一九七一）に依拠しながら、『五人の読者』の中で次のように説明している。

全体論的方法の目的は、「個体を個別的な個体として記述すること」であり、データからのテーマの抽出——一群のテーマのモデルへの統合——モデル群のタイプへの類別——総論への統合、という手続

きで分析を進める。テーマから総論まで、それぞれ下位のものへの適合度に応じて取捨されねばならない。

ホランドの「相互交渉批評」の理論では、「[テクストの]解釈は、[読者の]アイデンティティの函数である」(『五人の読者』)とされるので、読者のアイデンティティの把握ということが重要な課題となってくる。この点で全体論的方法こそがホランドにとって最も適切な方法なのである。彼は精神分析学者ハインズ・リヒテンシュタインのアイデンティティ論に基づき、人間のアイデンティティが「テーマと変奏」(variations)から成るものと考えているが、この、アイデンティティの根幹をなすところのテーマは、まさに全体論的に推定しうるという。「一人の人間の行動、言説、思考を、下位テーマからテーマへと抽象していき、最後に中心的な『アイデンティティのテーマ』(identity theme)を呈示することができる」(「相互交渉批評の相互交渉的解説」一九七八。以下「相互交渉批評」と略記)。もちろん、この中心的なテーマは「個々の事柄すべてが適合する」ものでなくてはならないのである。

人類学、社会学などで一般に用いられる全体論的方法が、ひろく他の分野でも用いられていることを、ホランドは『五人の読者』ほか諸所で指摘している。フロイト的な精神分析の方法がすでに全体論的だった、という。そしてとくに、それが文学批評で一般に用いられる方法であることが強調されている。文学批評というとき、ホランドの念頭にあるのは、新批評的批評だと考えてよいであろう。先の引用文の枕はまさに以下のようなものである——「新批評家がテクストの細部を中心的なテーマに収斂させていくのとほぼ同じように」。

『五人の読者』のあと、ホランドは相互交渉批評の概念の拡充に努めるが、アイデンティティのテー

マへの全体論的アプローチという点では、基本的に変わっていないようである。つまり、その意味で、ホランドは彼なりに「新批評家」であり続けているといえよう。ジョナサン・カラーは一九七六年の時点で「ホランド氏は統一性の概念をテクストから人間のほうに移した」（「読みの理論序説」）と評したが、これは最近のホランドについてもいえることであろう。なお「映画を〈私〉する」（一九八六）では、ホランドは映画の中にも「統一性とパタンを見いだそうとした」。新批評的な構えというのは、批評家ホランドの「アイデンティティのテーマ」ともいえるものであろうか。

2　文学への反応のダイナミックス

ホランドの文学理論家としての本格的な出発を明示するのは、『ダイナミックス』であろう。この本は二部構成で、第一部は「モデルの構築」（“The Model Developed”）、第二部は「モデルの応用」（“The Model Applied”）と題されている。主眼は第一部のモデル提唱にあるといえよう。まずこのモデルの輪郭を描きだしてみたい。

ホランドは、文学作品は「有機的統一性」をもつ、という前提に立ち、精神分析的解読は、例えばフロイトが『ハムレット』にオイディプス空想の表現をみたように、作品の中に「中核的空想」（nuclear fantasy）を見出す、としている。ホランドによれば、この「中核的空想」はテクストのすべての要素を集約するものであり、精神分析的解読が「新批評的」解読と同じようにテクストの細部の点検を通じて到達する一つの「意味」であるが、他のさまざまな意味に対して特権的な地位を占める「意味」なので

ある。なぜなら「精神分析のみいだす意味は、他のすべての意味の根底をなすのである」。

中核的空想は、口唇期、肛門期、尿道期、男根期、オイディプス期、潜在期、性器期という発達の諸段階のいずれかに呼応するが、通常、同時にいくつかの段階と関連づけられるものとされる。この空想の含む諸要素は読者に快楽を与えるが、同時に不安をひき起こすものでもある。ホランドは、このような不安に対する「防衛」(defense) が文学作品には組みこまれていると考える。つまり、文学作品は空想を「自我が受容しうる形」に変え、「空想が与えうる快楽の少なくとも部分的享受」を可能にする、というわけである。防衛的なこの「変形」(transformation) の、作品形態面の二つの作用因として、「構造ないしフォーム」と「言語への置き換え (displacement)」があげられている。

「フォーム」は「部分の排列 (ordering) と組立て (structuring)」を意味し、心理的な「防衛機構」に似た形で「根底にある空想を統御する (manage)」ものとされる。たとえば『マクベス』第五幕第五場の「明日、そして明日、明日が」にはじまる一〇行のイメージの排列は、この一節の中核にある「原光景の空想」に対し「否認による防衛」のような作用を及ぼすという。補足すれば、このイメージの排列は、一方ではそのような空想を読者のうちに喚起するように働き、他方では自らの喚起するその空想を打ち消してしまう、ということなのである。「幻滅の受容」という、この一節の「知的な意味」は、こうした「原初的な内容」の「昇華」のようなものとホランドは考えている。

「言語への置き換え」とは「読者の心的関心（つまりカセクシス）の『深い』空想のレベルから『より高い』言語活動のレベルへの置き換え」を意味する。この「置き換え」を担うのは、韻律、音などの「小さな意味でのフォーム」で、これらが運動感覚面の反応を起させることにより、また「一種の擬似

論理」を与えることにより、さらには一定の期待を満足させたり、裏切ったりすることによって、「空想を統御する」。散文より詩(そして類例として音楽)に多くみられる現象で、この場合、読者(または聴き手)は「無意識的な自我」のレベルからよりも、より多く「意識的な自我」のレベルから反応する、という。もちろん、散文の言語にも「置き換え」は見出されるだろう。ホランドは、マシュー・アーノルドの評論に多用される動作・状態の名詞化表現に「接触ぬきの生殖への願望」の「言語への置き換え」を読みとっている。

さて、「フォーム」を与えられ、「置き換え」が行なわれたテクストには、さまざまな「意味」、さらにはその集約としての「中心的意味」(central meaning)が見出される。ホランドによれば、それは「テクスト中の語や事件の遂次的な抽象と分類のプロセス」によって把握しうるものであるが、実は中核的空想の「変形」なのである。すなわち、「文学作品は、精神分析によって見出される無意識的空想を、伝統的な解釈によって発見されるような意識的な意味に変形する」。このような「意味」は「昇華」の機能をもつもの、つまり「空想内容」の「偽装表現」とみられている。

ここまでみてきたところでは、ホランドは「作品が変形する」という見方を示している。この「変形」と読者の関係はどのようなものであろうか。この点についてのホランドの説明はおおむね次のようである。

読者は、テクストの「変形のプロセス」を自分の中に「取り入れる」(introject)ことにより、「それをあたかも自分の心的な活動であるかの如くに感じる」。いいかえれば「文学は『取り入れられた変形』(introjected transformation)なのである」。(ホランドは、読者が「取り入れる」のは、「空想」のみ

であるようにもいう。「取り入れる」という用語を二様に用いているのだ。）しかし、読者はただ「取り入れる」だけではない。作品に自らの空想、不安、防衛構造すなわち「検閲官」(censor)、あるいは知的な諸観念を結びつけていくであろう（この結びつけを、ホランドはサイモン・レッサーの『虚構と無意識』（一九五七）の用語をかり、「連想」—“analogizing”—とよぶ。そしてしばしば、それが「空想」のレベルでのみ起るものであるかのようにいう）。ある種の前衛的な映画やイヨネスコ劇と同じく、それ自体としては「昇華的な意味」をほとんどあるいは全く与えず、読者が「意味」を補わねばならぬ文学作品もある。この「意味」は「防衛としての意味」(meaning-as-defense) といえる。「高度の緊張をはらみつつも不可解な作品」を自我に受け入れさせるために「読者が補う」ものとしての「意味」である。結局は、しかし、これも「空想内容」の「昇華」として機能するといえよう。いうまでもなく、ごく単純な作品は「防衛としての意味」を読者が補うことを求めない。が、大概の作品はこの両極端の間に位置を占めるだろう。

要するに、読者は作品の「変形のプロセス」を自分のうちに取り入れながら、そこにそれぞれ独自の付加を行なうということなのだ。したがって、「意味」もつまりは「テクストの限界内で読者が構成し、テクストに与えるもの」といえるわけなのである。

文学作品にこのように反応する読者の内部に、ホランドは二種類の〈読者〉を想定している。無意識的な「取り入れる読者」(introjecting reader) と意識的な「知的読者」(intellecting reader) である。前者は作品の「空想」を取り入れ、「個的な空想」を「連想する」〈読者〉であり、後者は作品を対象化し、「意味」を発見する。娯楽ものの場合、前者の活動の占める割合が大きく、偉大な作品に対しては、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com